

主 題：弟子としての犠牲

聖書箇所：ルカの福音書 14章25－35節

主とみことばに対して非常に忠実であるこの教会の働きに感謝します。世界のこの場所において、この教会はまさに神の福音の灯台のようなものです。皆さんに、そして、この教会に神は素晴らしい計画された働きを与えておられます。ですから、皆さんにこの教会の働きを忠実にサポートし続けていただきたいと願います。この教会の牧師先生を神に感謝します。神のみことばに忠実で、それを解き明かす賜物を与えられている先生を。神に、そして、神の王国にとって、この先生方は本当に宝です。皆さんにとっても先生は大きな祝福の元であると思います。ですから、あなたの講壇に招待して下さって本当にありがとうございます。この講壇は神のみことばが称えられ続けて来た場所です。この講壇から発せられてきたその真理は、他に見つけることが非常に稀なものです。ですから、今日私がここに立つことができるのは非常な特権です。毎週、日曜日ごとに行なわれて来たみことばの忠実な解き明かしのゆえにそう思います。皆さんといっしょにみことばを見て行きましょう。

どうぞ、ルカの福音書14章を見てください。25節から35節を見て行きたいと思います。ここで皆さんと弟子としてのその犠牲というものを考えてみたいと思います。そして、私たちの主イエス。キリストに従って行くことの大きな献身を見て行きましょう。神の王国にあって安易な信仰というのはあり得ません。むしろ、私たちにとって大きな犠牲と苦しみがそこには伴うのです。みことばからイエスが何を語られているのか見ましょう。このメッセージのタイトルは「あなたのすべてを犠牲にしなければいけません」です。25－35節「さて、大ぜいの群衆が、イエスといっしょに歩いてしたが、イエスは彼らのほうに向いて言われた。：26 わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、そのうえ自分のいのちまでも憎まない者は、わたしの弟子になることができません。：27 自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしの弟子になることはできません。：28 塔を築こうとするとき、まずすわって、完成に十分な金があるかどうか、その費用を計算しない者が、あなたがたのうちにひとりでもあるでしょうか。：29 基礎を築いただけで完成できなかったら、見ていた人はみな彼をあざ笑って、：30 『この人は、建て始めはしたもの、完成できなかった。』と言うでしょう。：31 また、どんな王でも、ほかの王と戦いを交えようとするときは、二万人を引き連れて向かって来る敵を、一万人で迎え撃つことができるかどうかを、まずすわって、考えずにいられましょうか。：32 もし見込みがなければ、敵がまだ遠くに離れている間に、使者を送って講和を求めましょう。：33 そういうわけで、あなたがたはだれでも、自分の財産全部を捨てないでは、わたしの弟子になることはできません。：34 ですから、塩は良いものですが、もしその塩が塩けをなくしたら、何によってそれに味をつけるのでしょうか。：35 土地にも肥やしにも役立たず、外に投げ捨てられてしまいます。聞く耳のある人は聞きなさい。」

ここから話をする前に、私について少し話をします。何年も前になりますが、大学時代、私はフットボールをしていました。高校3年生のとき、大学に進学するに当たって私は大学でのすべての費用をまかなってもらえるという奨学金を受けました。つまり、4年間、私にかかるすべての費用はカバーされたのです。私の学費は全額支払われました。私の寮の部屋、私の本、私の授業料、すべては「ただ」でした。私の家庭教師も私の洗濯にかかる費用もすべてただでした。私のフットボールのユニホームも道具も、遠征に行く飛行機代もホテル代も全部ただでした。私に対していっさいの費用はかからなかったのです。私の父はこの話を聞いたとき非常に喜んでいました。確かに、すべてのものはこのようにただだったのですが、皆さんに知っていただきたいことは、その後の4年間、私は私のすべてを支払わなければならなかったということです。夏の暑い日差しの下で私たちは日に2度練習をしなければいけなかった、毎日、完全な試合の形でも練習がありました。私はウェイトトレーニングをしたり一生懸命走って鍛える訓練の中にありました。綱登りをしたりスタジアムの中を走り回ったりしなければならませんでした。このことを毎日1年間ずっと続けなければならませんでした。一番楽だったのは実際に試合をすることでした。なぜなら、試合のための準備、練習は私にとって非常に辛いものだったからです。ですから、私が皆さんにお伝えしようとすることは、すべてはただだったのですが、そのために私のすべてを犠牲にしなければならなかったということです。そして、そのことこそがまさにクリスチャンの生活の中にも起こっているのです。

救いというのは無償の賜物です。イエス・キリストの十字架によってその賜物は無償で与えられます。イエスが十字架の上で亡くなられたとき、イエスはこれで「完了した」と言われました。これはすべて支払われたという意味です。けれども、それが私たちに備えられたときに、私たちが完全な献身をもってそれを受けなければならぬという条件がありました。だれひとりとして神の王国に入ることはありません。そして、イエス・キリストの無償の賜物を受けることはないのです。もし、イエス・キリ

ストのために自分自身のすべてを投げ出すことがなければ。私たちを召しているものが私たちがどのような条件でそこに入ることができるのかを定める権利があるのです。私たちは自分の条件でキリストに従うことはできません。これらの条件というのは交渉することができないものです。主イエス・キリストによって確定され揺るがないものです。そして、この献身なしにイエス・キリストに従うことはだれひとりできないのです。これがイエスが最初に話されたことです。イエスはこの献身をもっていなければわたしに従うことはだれもできないと言われます。私たちは確かにこのように言えます。イエスは決して私たちがイエスに従うという契約書に、項目を小さな文字で書いたりしないのです。イエスは決してそれをオブラートに包んですぐに受け入れることができるようにしなかったのです。イエスは決してその基準を下げることをなさいませんでした。イエスは条件を柔らかくすることはしなかったのです。イエスは弟子となることのその要求を下げなかったのです。そこには中立というものはありません。すべてかないかのどちらかです。キリスト者になるために私たちはほとんど何もしなくても構わない、ただ、私たち自身すべてをささげなければいけないだけです。

これらの箇所を見ると、まず、文脈を見ましょう。25節を見ると「**大ぜいの群衆が、イエスといっしょに歩いていて**」ことを見るができます。イエスはエルサレムに向かっていました。そして、ペレヤを通してそこへ行こうとされていました。そのときに、多くの群衆がイエスに従っていました。多くの人たちは興味深さのゆえに従っていたのです。また、多くの人たちはイエスが行なった奇蹟のゆえに付いていました。そして、彼らはイエスのように語るメッセンジャーを見たことがなかったのです。ですから、そこには非常に大きな興味がありました。何百、何千という人たちがイエスの周りにいたのです。けれども、この群衆に関してイエスは何かを知っていたのです。イエスは群衆の一部になることがどれほど簡単なのかをよくご存じです。けれども、献身することがいかに難しいのかをよく知っておられました。イエスはそれゆえに、多くの人たちがイエスに付き従っていたかもしれないけれど、本当に従っている者が少ないことをご存じでした。多くの方は単に興味深さのゆえにイエスに従っていたのです。そして、そのことは今日多くの教会でも同じです。多くの人たちは教会にやって来るかもしれないけれど、イエス・キリストに対する献身をもっていないのです。多くの人たちは群衆の一部になることが好きだから教会に来るのです。彼らは真理を聞くことが好きだから教会に来るのです。けれども、多くの人たちは同時にイエス・キリストに対する献身を一度もしないで過ごしています。それがここで起こっていた状況なのです。ですから、25節に見るようにイエスは突然止まり、彼らの方を向いて言われました。そうするときイエスは人々を揺るがすのです。もし、そこに献身をもっていない人がいるなら、その人たちが救われる信仰に到達することができる。

26節からイエスは本当のクリスチャンになるためにはどんなことが必要なのかをしっかりと告げられます。名だけの従者となることがないように、本当に正しくイエス・キリストに従って行く者となるために。ここでカギとなることばは26－27節に出て来ます。そのことばは33節にも出て来ます。それは「弟子」ということばです。イエスは一度たりとも単なる決心に興味があったのではありません。イエスは弟子を求めておられたのです。群衆がどれ位の人数なのかということに興味があったのではありません。イエスは献身に満ちた弟子を求めておられたのです。いったい弟子とは何でしょう？本当の弟子とはイエス・キリストを本当に信じる者です。その人はイエス・キリストに従うためにあらゆるものを後ろに置いてきた者です。イエスはマタイ28：19で「**それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。**」と言われました。これが教会に与えられた大宣教命令です。イエス・キリストの名によって弟子を作ること、弟子というのはイエス・キリストを信じるその救われる信仰によって、信じる者へと変えられた者です。使徒の働き最初の章では、すべてイエス・キリストを信じる者は弟子と呼ばれました。使徒の働き11章になるまで、事実クリスチャンということばは見当たらないのです。本当のクリスチャンは常に弟子たちであり、本当の弟子たちは常にクリスチャンなのです。イエスが26節から言い始めることは、私たちに衝撃を与えるものです。このときに聞いていた人たちを震え上がらせるようなことばでした。イエスは故意にそのことを為さったのです。これは彼らを最終的な決断へと押しやったのです。ある人たちは確かにいやな思いをしたでしょう。ある人たちはイエスといっしょに歩くことをしなくなったでしょう。けれども、聞く耳をもっていた人たちにとっては、主イエス・キリストにより近づくために必要なことばだったのです。ですから、皆さんといっしょに今日見たいことは、イエス・キリストに従う者となるというのはどういうことなのか、それを知ることです。

☆イエス・キリストの弟子になるとはどういうことか？

イエス・キリストだけが私たちに手を差し伸べてくださるのです。それは単に教会に来る人ではありません。クリスチャンの家庭に生まれて来た人が救われるのでもありません。これら二つは重要かもしれませんが、本物のクリスチャンというのは、この世を変えることができる人物というのは、本物のキ

リストの弟子しかいないのです。キリストの弟子だけがキリストのためにこの世に影響を与えることができるのです。本物の弟子だけがイエス・キリストの大宣教命令を成就することができるのです。ですから、私たちはすべて本物の弟子とならなければなりません。これがイエスが掲げた非常に高い基準です。これは神のすばらしい恵みのわざが私たちの心のうちになければ為されないことです。この基準に到達するために恵みが必要なのです。26節を見てください。イエス・キリストの弟子となるとは？

1. キリストをだれよりも何よりも愛する 26節

第1番目の項目、これは最も高い献身です。もし、私たちがイエス・キリストの弟子になろうとするなら、その人はこの世にあるだれよりも、また、何よりもキリストを愛さなければならないということです。「**26 わたしのもとに来て、**」、このイエス・キリストに来るということは、イエス・キリストを信じる救われる信仰を働かせるということです。イエス・キリストのもとに来るということは、イエス・キリストを信じるということです。ここには「だれでも」ということばが加えられていますが、それは他のどんな人でもここに来る人は、ということです。この「**わたしのもとに来る**」というのが唯一人々がイエスに来ることができる条件なのです。もし、だれでも「**わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、そのうえ自分のいのちまでも憎まない者は、…**」と、イエスが言ったことを見てください。「**わたしの弟子になることができません。**」と、ここで言われていることはとても厳しい宣告のように聞こえます。また、非常に攻撃的に聞こえます。このことばは極端なことに思われます。しかし、これは真実であり絶対に必要なものです。このことばは頁から飛び出して来るようです。それは「憎む」ということばです。イエスが言われるのは、あなたの父母を憎まなければいけない、あなたの妻や子を憎めということです。自分の兄弟、姉妹も、そして、自分自身のいのちさえも…。そうしなければわたしの弟子になることはできないと言うのです。イエスはいったい何を言っておられるのでしょうか？確かに、聖書の他のところでは私たちに「あなたの両親を愛しなさい」とあります。十戒の5番目の命令は「**あなたの父と母を敬え。**」です。イエスは非常に強力強大な比喻を使っているのです。これは対比を表わそうとしているのです。ここで強調的な表現を使っています。それを使うことによって私たちに驚きを与えようとするのです。そして、私たちがしっかり注目をするようにと。イエスはここで「憎む」ということばを使うことによって「愛」と「憎しみ」を対比するのです。イエスが言われるのは、私たちが余りにもイエスを大きく愛するがゆえに、他の人たち、私たちが最も愛していると考えているこの地上の人たちに対する愛は、まるで憎しみにしか見えない、私たちがイエス・キリストに対してもっている愛に比較するならそれは憎しみにしかならないということです。これは私たちが愛する者を愛するという命令ではありません。これはイエス・キリストをもっともっと愛さなければいけないという命令です。マタイの福音書10：37でそのことを明確にします。みことばがみことばの最大の注解書です。イエスは「**わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。また、わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。**」、ここではっきり語っておられることは、イエス・キリストに対する高い献身です。キリストに対する高い思いです。イエスはだれの人生においてもNO. 2にはならないのです。イエスは単に横に乗ってくださっている方ではないのです。イエスは常に私たちにとって一番でなければならないのです。そうでなければイエスは私たちにとってどんな存在でもないのです。イエスのことをあなたは何よりも愛しておられますか？

私は皆さんの目を十字架に向けさせます。そこには神の御子が掲げられています。私たちの身代わりとして。そこで私たちのために血を流して私たちの救いを買取ってくださったのです。いったい、どのように私たちはこの方を愛さずにおれるのでしょうか？なぜなら、彼だけが私たちの永遠の救いを買取ってくださったからです。私たちのことをこのように愛してくださった方はだれ一人としていません。だれも私たちのために自分のいのちをこのようにして投げ出してくださった方はいないのです。だから、私たちはこのキリストをだれよりも愛さなければいけないのです。では、いったいこの26節では何が困難なのでしょう？ここでイエスは「**そのうえ自分のいのちまでも憎まない者は…**」と言います。ここには自分自身に対する死というのがあります。自分を喜ばせることや自分を安らがせる、そのようなことに死ななければいけないのです。私たちは自分自身を高めようとする、自分自身がすばらしいと願う、そのような思いに死ななければいけないのです。私たちはキリストを何よりも愛さなければいけません。自分自身を中心として自分に焦点を当てるのではなく、キリストを中心としてキリストに焦点を当てた人生、私たちのたましいの最も大きな情熱にイエス・キリストがなければいけないのです。私たちの最も大きな愛の対象がイエス・キリストでなければいけません。キリストが私たちのすべてでなければいけないのです。イエス・キリストこそアルファでありオメガなのです。そして、その間にあるすべてなのです。パウロは「**私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。**」（ピリピ1：21）と言いました。彼の人生すべてはキリストだったのです。彼はイエスのために生きました。彼はキリストのために死にました。彼にとって死さえも益だったのです。なぜなら、彼はキリストとにいたことが

できるようになるからです。彼の人生は自分自身のものではありませんでした。すべての願望はキリストのためのものでした。彼のすべての目標はキリストのためだったのです。すべての追求はキリストのためでした。あらゆることはイエス・キリストの栄光のためだったのです。イエスはこれが弟子となることだと言われました。弟子というのは自分自身のために生きるのではないのです。イエス・キリストという自分の主人のために生きるのです。

皆さんはイエス・キリストの弟子ですか？皆さんは自分自身に死なれたでしょうか？皆さんはこの世に対して死にましたか？皆さんは後ろにかかっている橋を燃やし尽くしましたか？皆さんはキリストのために出て行っておられますか？皆さんの人生のあらゆることはキリストを中心に回っていなければいけないのです。皆さんが選択するあらゆることはキリストの栄光を最も現わすものでなければいけません。私がすることすべてがキリストの名を高く掲げなければいけないのです。いったい、どうすればキリストの御国が確立されて行くのでしょうか？それを考えて生きることがイエス・キリストの弟子として生きるということです。イエスは言われました。「だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。」（マタイ 6：33）と。でも、イエスはそれだけを言ったわけではありません。

2. 自分自身を十字架につける 27節

27節を見てください。イエスは弟子になることはどういうことかについてさらに話します。自分自身を十字架につけることがなければいけないと言います。イエスはご自身の口から出る最も厳しい要求をここでなさっています。「**自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしの弟子になることはできません。**」、イエスは否定的な表現で話しておられます。そうすることによって私たちの心により大きな衝撃が残るように。イエスは両手を伸ばしておられます。そして、あなたはわたしのもとに来ることはできません、自分の十字架を負うことがなければ、わたしについて来ることがなければと。新約時代のローマ帝国の中に生きている人たちにとって、また、特にパレスチナに生きている人たちにとって、イエスが言っているこのことばを誤解することはありませんでした。あらゆる人たちは十字架刑が何であるかを知っていたのです。そして、すべての人たちが自分の十字架を負っている人を見たことがあるのです。刑場に連れて行かれるその姿です。少し背景を説明させてください。有罪とされた犯罪者はローマの支配者のもとで裁判を戦います。そして、その人が確かに有罪だとされるとその人は死罪に定められます。それは十字架による死です。ユダヤ人たちは十字架刑をする権利はありませんでした。ローマ帝国の偉大な力を誇示するために、そして、人々の心に恐れを抱かせるために、ローマ帝国によって有罪と定められた人は、自分の十字架を負って、自分の死ぬ場所へとそれをもって行かなければならなかったのです。それはすべての人たちに対してローマの力がいかに偉大なのかという宣告でした。そして、それは「死の行進」と呼ばれました。死刑を宣告された人が自分の十字架を負って町の中を歩んで行くとき、人々はそこに出て来ます。そして、両側に並んで十字架を負っている人を見つめます。それは公の前での辱めの行為でした。この十字架を負っている人は確かに上にある権威のもとにあることの証明です。彼はローマ帝国の支配のもとにひざまずいているのです。だから、ローマの皇帝はすべてのものよりすばらしい方です。そして、彼は死罪を宣告された通り確かに有罪であるということです。

イエスご自身もそのさばきの場からカルバリの丘に到るまで十字架を背負われました。確かに、彼自身がローマの支配のもとにあって有罪を宣告された者として。それがここでイエスが人々に伝えようとすることです。人がローマ帝国のもとに立つように、そこで有罪だと宣告されるのと同じように、私たちはキリストの前に立たなければならぬのです。そして、キリストの前にあって確かに言われるように私は有罪であるということを認めなければならぬのです。私たちは自分の罪を認めなければいけません。そして、その罪を告白しなければいけません。それを公にされ、私たちの主人の権威のもとにひざまずかなければいけないのです。イエス・キリストの権威のもとにひざまずくのです。そして、公の場で大きな声で「私は確かに自分の罪のゆえに有罪である」と言うのです。私自身のいのちをキリストにささげるのです。だから、キリストは私の支配者であり、私たちの上に権威をもつ方であり、私たちがどんな道を行こうとも、私たちの人生すべてにおいて私たちは自分の十字架を背負い続けなければいけないのです。そして、権威のもとにある男性、女性として、イエス・キリストの支配下にあって、弟子はだれひとりとして自分の思うように生きる人はいないのです。私たちはイエス・キリストの支配下で生きるのです。だから、イエス・キリストは「**自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしの弟子になることはできません。**」と言われるのです。26節ではイエス・キリストのもとに来る人がわたしの弟子であると言い、27節ではその者はイエス・キリストに従って行く者であると言います。だれでもイエスのもとに信仰をもってやって来る人は、毎日、イエス・キリストに従って行くのです。これはまるで、狭い門は厳しい険しい狭い道へと続いていると言っているようです。もし、本当にキリストのもとにやって来たなら、あなたは毎日の生活にあってキリストに付き従っている者です。それが

なければ、だれ一人としてキリストのもとに来ることはできないのです。これがイエス・キリストの弟子になるということです。これはイエス・キリストがわたしに従って来なさいと導かれるところどこにでもついて行くことです。それはイエスの足跡に一步ずつ従って行くことです。イエスはここで私たちをどこに導くのか告げていません。私たちが知らなければいけないのはキリストだけです。だから、キリストに従えばいいのです。キリストについて行くならキリストは私たちを未来へと連れて行ってくれます。キリストはもうすでに未来を知っておられます。私たちはイエスが歩まれたように歩まなければなりません。イエスが生きられたように生きるのです。彼が語られたように語ります。私たちはイエスが喜ぶことに喜びを見出さなければいけません。私たちはイエスが嘆かれることに嘆き、私たちが良いときでも悪いときでもイエスに従って行くのです。それが私たちに良いことをもたらすときでも、困難なときでも…。そして、私たちはイエスに従って行くとき、イエスとペースを合わせて進んで行かなければなりません。決して遅れてはならないのです。そして、そこから離れてはいけません。弟子たちは常に主人の横に付き従っています。そして、イエスの後に従って行きます。それが皆さんが今日しなければならないことです。これが皆さんが明日しなければならないこと、来月しなければならないことです。クリスチャンの生活は非常に単純です。ただ単にイエス・キリストだけです。彼がどこに私たちを導こうとも。

皆さんはイエスに従って行くために自分の十字架を背負われましたか？皆さんは自分の罪深さに気付かれましたか？それを神に告白されましたか？イエスの主権にひざまずきましたか？皆さんはイエスが私たちの人生を導く権利があるということを認めましたか？自分自身に死にましたか？皆さんは自分の人生をイエス・キリストにささげましたか？これがイエス・キリストの弟子となるということです。これ以外の何ものもありません。そうでなければ皆さんはイエス・キリストに従っていないのです。これが皆さんにとって小さな門なのです。わずかな者がこの小さな門を見つけるのです。だから、わずかな者しかこの狭い道を通して行く者がいないのです。この小さな門から入って行きたいと心から願い努力する者だけです。この小さな門を通る前に、イエスに従う者となる前に、皆さんに三つ目のことを見ていただきたいのです。

3. 注意深く計算をするように 28-33節

イエスは皆さんに注意深く計算をするようにと言われます。イエスはここで二つのたとえを話されます。イエスに従う前にそこで支払わなければならない犠牲をよく考えなさいと言います。1番目のたとえは28-30節にあります。2番目のたとえは31-32節にあります。イエスがここで言われることは、皆さんは中間的な決断をすることができない、浅い献身をすることができないということです。皆さんはよくこのことを考えなければいけません。なぜなら、ここに非常に多くのことがかかっているからです。だから、28節でこのように言います。**「塔を築こうとするとき、まずすわって、完成に十分な金があるかどうか、その費用を計算しない者が、あなたがたのうちにひとりでもあるでしょうか。」**、これは同じ群衆に向かって語られています。多くの人たち、特に余り深く考えないで従って来た人たち、彼らは自分自身の願望で自分自身の条件でイエスに従って来たのですが、彼らにとってはそれが都合よかったのです。その人たちに目を向けてイエスは「あなたがたのうちいったいだれが…」と言われるのです。塔を築こうとすることに先ず最初にすわって、完成に必要な金があるかどうか考えなければいけない、その費用を計算しない者があるか、だれでも塔を建てようとするなら最初にどれ位の費用がかかるのか、その計画を達成するのに十分な費用があるかどうかを考えないのでしょうか？もし、それを始めて建て切ることができなかつたなら、どれ程の恥を受けるでしょう？始めて途中でそれを止めてしまう、だから、賢い人は塔を築く前に計算をするのです。29節では**「基礎を築いただけで完成できなかったら、」**、これは計算することがなかったらということです。計算することがなく基礎だけを築いたのです。このたとえはイエスに従い始めようとした人のことです。けれども、従うに当たってどれ位の費用がかかるのかを考えなかった人たちです。だから、ここでそれを完成できなかったと言います。十分な費用をもっていなかったのです。これを**「見ていた人はみな彼をあざ笑」**うのです。始めたものの完成できなかった、費用が余りにも高かったのです。30節**「『この人は、建て始めはしたものの、完成できなかった。』と言うでしょう。」**皆さん、この塔を建てるのにどれ位の費用が必要だったかお分かりでしょうか？それはここにいる人たちが皆がイエスに従うために必要な費用と同じです。皆さんのすべてが費用なのです。皆さんの人生すべてが費用です。単に日曜日の朝だけではありません。毎日、週のすべての日が必要です。これが本当の弟子となるために必要なことなのです。

2番目のたとえが31節に記されています。イエスは群衆の同じ人たちに向かって話しています。イエスが簡単に安易な思いで従おうとしている人たちに対してです。イエスは最初のたとえに加えてこのことを言われます。**「また、どんな王でも、ほかの王と戦いを交えようとするときは、二万人を引き連れて向かって来る敵を、一万人で迎え撃つことができるかどうかを、まずすわって、考えずにいられましょうか。」**イエス

はこの2番目のたとえを話すに当たってあなたは真剣にこのことを考えなければならないと言います。いったいどんな王でも、この王が塔を建てようとした王ですが、この王こそが群衆の中に多くいた安易に従っていた人たちです。どんな王でも他の王と戦いを交えようとするとき、先ず、すわって自分は迎え撃つことができるかどうかを考えないか？この王は一生懸命その犠牲を考えるのです。彼は本当に1万人で2万人で立ち向かってくる敵に戦いを挑むことができるのかどうかを。1万人しかもっていない王はだれでも2万人の兵士をもっている王に立ち向かって行くのは、愚かな行為でしかありません。それは明らかに気が狂った行為です。明らかに兵士の差があります。それゆえに圧倒的な形で敗れてしまうはずです。もし、1万人の兵しかもっていない王がいるなら、2万人の兵をもつ王に和解を求めないでしょうか？そして、何とか平和を講じる方法を考えないでしょうか？32節「もし見込みがなければ、敵がまだ遠くに離れている間に、使者を送って講和を求めましょう。」、自分よりも偉大な強力な王に戦いを挑むことはまさに愚かなことです。このたとえ話のポイントをはっきりしています。1万人の兵をもっているのはどのような人物でしょう？イエスの声を聞いていた人たちです。彼らは半分しか献身していなかったのです。彼らは本当は献身していなかったのです。もしかすると、そのような人がこの中にいるかもしれません。そして、2万人の兵をもってやって来る王とはだれでしょう？その王は他のだれでもありません。王の王、主の主です。絶対的な主権者である天の王、イエス・キリストです。そして、イエス・キリストがやって来るときに、皆さんは今この瞬間に自分の人生をささげなければいけないと言われます。イエスが差し伸べられている和解のその手を握らなければいけないのです。イエスは皆さんに和解を求めておられるのです。でも、和解を求めるものがその条件を決めるのです。そして、その和解の条件はあなたの人生を完全に捨て去ることです。無条件に完全に絶対的な王であるイエス・キリストにすべてをささげなければいけないのです。

1番目のたとえのポイントは、皆さんがイエスに対して献身をする前に、自分の犠牲を考えなければいけないということです。2番目のたとえのポイントは、ここにいる者のだれひとりとしてこの献身をしない者はいない、どれだけ費用がかかってとしても、私たちはそれをせずにはおられないはずだということです。なぜなら、イエスは確かにやって来られました。そして、この世の終わりに確かにイエスはやって来られるのです。そして、イエスを知らない者たちに対して、そこには完全な破壊が待っている、彼らは地獄に投げ入れられます。完全に敗れるのです。だから、イエスが言われるのは、今計算をしてわたしに従順に従いなさいということです。

そして、33節でこの二つのたとえの最終的な答えが出てきます。「そういうわけで、…」とこれは要約をしています。「あなたがたはだれでも、自分の財産全部を捨てないでは、わたしの弟子になることはできません。」と、イエスはこれもまた否定的に言われますが、それは私たちの耳に衝撃的なものになるためです。ですから、それによってイエスのことばは私たちを掴むのです。「…わたしの弟子になることはできません。」と、まるでイエスが神の王国に入るためのドアを閉じようとしているかのようです。そして、そのドアにはわずかな隙間しかないのです。イエスはあなたはこれをしなければ決してそのドアに入ることはできません、「自分の財産全部を捨てないでは、わたしの弟子になることはできません。」と言われます。イエスがここで言っていないことは、あなたが持っているあらゆるものを捨てなければイエスに従うことはできないということです。イエスが言っていることはあなたが持っているものをすべて王であるイエス・キリストに譲渡しなければいけないということです。イエスこそがあなたの主人です。あなた自身、そのすべてがイエスのものとなるのです。あなたが所有しているあらゆるものがイエスのものとなるのです。あなたの全財産、時間、才能、頭のとっぺんから足の底に到るまで、あらゆるものが主であるイエス・キリストに譲渡されなければいけないのです。これがイエス・キリストの弟子となるための条件なのです。だれ一人として、片足を王国に入れ片足をこの世に残すことはできません。皆さんはここへ到達されましたか？皆さんはイエス・キリストに従う条件が何なのかをしっかりと理解しておられますか？皆さんはこの場所にやって来られたのでしょうか？皆さんの家はイエスのものです。皆さんの子どもはキリストの子どもです。皆さんの車はキリストの車です。皆さんの人生すべてはキリストのものです。それがイエス・キリストの弟子となるということです。これが唯一私たちが生きる方法です。いったい皆さんがどれ程キリストにささげたとしても、皆さんはそれより遥かに大きなものをキリストから受けたのです。永遠のいのちをキリストから与えられたのです。罪の赦しを受けます。皆さんは生まれ変わるのです。神の子どもへと変えられ、キリストとともに相続財産を受け継ぐ者となります。そして、キリストは皆さんの必要を満たしたいと献身しておられます。主は私の牧者であり私には乏しいことがない。皆さんの罪の負債をイエスはなしにしてくれるのです。そして、それに加えてキリストは私たちに平和と愛と喜びを与えてくれるのです。キリストはお金で買うことができない、死が取り除くことができないものを私たちに与えてくれるのです。私たちがしなければならないことは、私のわずかな人生をささげることだけです。私たちのいのちは余りにも小さなものです。そして、それを私たちが主に与

えるときに、主は私たちに偉大な相続財産を与えてくれるのです。私たちがたとえ全世界を手に入れたとしても、自分のいのちを失うなら、いったいそのいのちのために何を与えることができるでしょう？ 私たちは王の基準に比べるならほんのわずかなものしかもっていません。けれども、そのわずかなものをキリストにささげるのです。そして、私はすべてをキリストにささげるのです。そうすると、キリストは彼がもっているあらゆるものを私に与えてくれるのです。キリストのうちにあるあらゆるものを私たちにくださるのです。これが最もすばらしい交換です。十字架の上で私たちの罪を取り除いてくださり、イエス・キリストのもとにそれを与え、その代わりに私たちはキリストの義を受けたのです。私たちは泥を与えてダイヤモンドを得たのです。私たちの全世界において最もすばらしいことはキリストの弟子であるということです。スポルジョンはこのように言いました。「もし、神が皆さんに仕えるものになりなさいというなら、どうして王になりたいと思うのでしょうか？」

4. 自分自身の心を吟味する 34-35節

最後にこのことを知ってください。34節を見てください。イエスはここで彼に従う者が完全に心からの従順をもっていなければいけないと言っています。名ばかりの弟子であってはいけないのです。それはキリストの弟子ではありません。だから、34節でこう言います。ここからこれまで言ってきたことの最終的な結論が出てきます。**「ですから、塩は良いものですが、」**、塩は良いものです。良い肉を保存します。腐ることを防ぐのです。そして、味を加えます。でも、**「もしその塩が塩けをなくしたら、何によってそれに味をつけるのでしょうか。」**、イエスが言われることは、ある塩は最初は良いものに見えるかもしれないけれど、あるものはそこに他の物質が混じっていることがあります。いろいろな鉱物が含まれています。そのようなものが含まれていると時間の経過でそれが現われてきます。そして、それが良い塩でないことを証明するのです。純粋な塩でないことが分かります。けれども、半分だけは塩であることが分かりますが、それによって味気を失ってしまいます。それゆえに、その役割を果たさなくなります。だから、味気を失った塩にいったい何ができるのかということです。35節**「土地にも肥やしにも役立たず、外に投げ捨てられてしまいます。聞く耳のある人は聞きなさい。」**、全く役に立たない、益をもたらしませんと言います。なぜなら、それは半分塩であって半分他の物質だからです。土地を豊かにすることもできないし、肥やしにもならない、肥やしの臭いを消すために使うこともできないのです。全く何の役にも立たないのです。イエスはいったいだれについて話しているのでしょうか？それは半分の心だけで従っている弟子たちに向かって言われるのです。半分しか興味をもたずに聞いている者たち、片足だけ入れて片足は外に出していたいと考えている人たち、彼らはまるで半分塩で半分は違う物質であるような者たちです。イエスがここで言っていることは、皆さんが弟子となってイエスに従わなければいけないということです。

皆さんはイエスの弟子としてこの世のあらゆるものよりも、あらゆる人よりも、イエスを愛さなければいけません。イエスが皆さんにとってのすべてでなければいけないのです。そして、イエスに対する愛というのは、皆さんがもっとも愛すると考えている人に対する愛を、まるで憎しみかのように見えるほどの大きな愛でキリストを愛するのです。イエスは言われます。自分自身に死ななければならぬと。私たちは十字架を負わなければいけません。そして、毎日それを背負わなければいけません。そして、私たちはキリストの權威に従っていなければいけません。私たちの主であるイエス・キリストの死に従わなければいけないのです。そして、私たちは自分の人生すべてを投げ出していなければいけません。イエスの条件によって私たちは和解を得たのです。その条件というのは、王であるイエス・キリストに完全にあらゆるものを投げ出すことです。私たちのすべてをイエスに譲渡したのです。そうしなければ私たちはイエス・キリストの弟子ではないのです。これがイエス・キリストの弟子であるということです。この献身は非常に大きな献身です。それゆえに、これは神の御霊である聖霊の働きがなければ、私たちにこのような悔い改めをさせることはできません。このような救いをもたらす信仰を私たちの心に起こすことができないのです。これは神の恵みの働きです。パウロは私が今の私であるのは神の恵みによると言いました。皆さんは神がこの働きを私の心にしてくださいと願っていただけますか？もし、皆さんがこれまで一度もイエス・キリストの弟子になったことがないとするなら、今日、今この瞬間、閉ざされている狭い小さな門が広く開いていることを知ってください。そして、キリストは皆さんを自分のもとへと呼んでおられるのです。この日、イエスが人々に向かって召されたように。今日、この朝、イエスはのみことばを通して皆さんを呼んでおられるのです。イエスは続けて罪人たちがわたしのもとに来るようにとされます。そして、今日皆さんがイエスに従うように呼びかけているのです。皆さんはそこで怠けてすわっていることはできません。そこで受動的に眺めることはできないのです。前に行かなければいけません。そして、自分の十字架を負ってイエスに従って行かなければいけないのです。これだけがいのちに繋がっている道です。この道だけが王国に繋がる道です。そして、これだけが天に繋がる道です。

最後に、皆さんにある人が書いたものを読みます。著者はわかりませんが、「私は弟子である」というタイトルが付けられています。「采はすでに投げられた。私は線を越えたのだ。決定は下された。私はイエス・キリストの弟子である。私は見上げることをせず、休まず、スピードを落とすことをせず、逃げ出さず、立ち止まらない。私は栄えることを望まない。私は富も地位も昇格も、そんなものは要らないし、正しくありたいとも、一番でありたいとも、頂上に立ちたいとも思わない。人々から認められたり、褒め称えられたり、報酬を受けたりしたいとも思わない。私の進んで行く道は決められている。私の足取りは速いものである。私の目標は天だ。私の道は狭く進む道は険しい。私とともに歩む者は少ないけれど、私を導く方は信頼できる方だ。そして、私の為すべきことははっきりしている。私は決して買収されることはない。私は妥協することもない。私は他の道に進められることもない。私は遅らされることもない。私は犠牲というものの前に立ってもためらうことはない。私は逆境に前に立ってもおじけづくことはない。私は敵のテーブルの上で彼らと交渉することはない。私はあきらめない。私は後ずさりしない。私は休まず黙らない。私がメッセージを語り告げ、祈り告げ、そして、その宝を積み上げるまでは。キリストの大義のためにそれをなす。私はイエス・キリストの弟子である。私はイエスが戻って来られるまで進み続ける。私は倒れるまでささげ続ける。私は皆が死ぬまでメッセージを語り告げる。私は彼が戻ってくるまで働き続ける。彼がご自分の民を集めるために戻って来られるそのときに、イエスは私を見逃すことは絶対にない。なぜなら、私の色ははっきりしているから。私はイエス・キリストの弟子である。」。

皆さんがイエスの召しに答えてくださるように。皆さんがイエスに付き従って行くように。これは人生にとって最もすばらしい冒険です。そして、これだけが天国に通じているのです。皆さんがイエス・キリストの弟子でありますように。アーメン。